

メロヴィング期ベリイ地方における空間組織

——古代的都市＝農村関係の存続と展開——

佐藤 彰 一

1. 問題の所在

近年、古代から中世初期にかけての西欧を対象とする農村史、定住史研究は目覚ましい成果を挙げ、これまでの定説を覆す一方新たな問題を浮かび上がらせつつ、著しい進展を見せており、それは認識論上の革新とも呼びうる水準に達していると言っても過言ではない。この時代に関する史的基盤の拡大は、こと文献史料については極めてかぎられており、新史料の発見はごく例外的事態である。⁽¹⁾ こうした状況にもかかわらず、この時期の農村生活の実態を以前に比べてはるかに具体的に知りうるようになったのは、考古学的発掘調査とそれに基づく研究の蓄積によるところが大きい。⁽²⁾ 考古学者アラン・フェルディエールの近著『ローマ期ガリアの農村地方』⁽³⁾ は現時点での発掘成果の総括を試みた著作であるが、それは地域差はあるもののローマ支配下ガリアでの土地占取と定住および開発が、われわれの想定を上回る規模で展開していた事実を当時の農業の自然的、技術的条件をも含めて明らかにしているのである。

こうした成果は、中世初期史の領域でいまや基調となっている後期古代的諸条件の中世への連続という認識に重なり、中世の開始期についてこれまでわれわれが描いてきた画像から離れて、古代に一層引きつけた形でそれを再構成することを要請しよう。もちろんこの場合にも、地域の独自性や、連続する側面と断絶の局面との微妙な交錯には絶えず注意を払わなければならない。

古代史学からのもうひとつ大きな寄与は、都市・農村関係を基軸とするどちらかと言えば理論的な考察に関わっている。この新たな動向については、すでに紹介をしたことがあるので⁽⁴⁾ 詳細はひかえるが、本稿の意図を明らかにするために最少限度の説明は必要であろう。

その主張の核心を、実証と理論の両面で優れた成果を挙げたフィリップ・ルボアの議論に即して説明するならば、伝統的かつ古典的見解と異なり、ローマ期の定住空間は都市と農村、二つの空間領域の単純な対照として把握することができない。そうではなくて、一方では首邑都市たるキヴィタスと農村ヴィラがセットとなってひとまとまりの経済圏を構成し、いわばローマ型とでも呼ぶべきセクターを編成する。これに対して他方では、ローマの影響に抵抗し、土着の伝統的小集落であるヴィクスを中心として形成された非ローマ型セクターと称されるような空間領域が存在した。この二つのセクターの間に見られる差異は、それぞれが二つの異なる

(1)

社会構成体に属しているとも言えるほどに際立っており、こうした対照こそがローマ期における空間編成の基本原理であったとするのである。⁽⁵⁾

こうした考察に根拠があるとなれば、たとえば4世紀ガリアのローマ社会の政治的、文化的衰退のあかしとしてしばしば引き合いに出される、都市支配層のヴィラへの撤退という現象は何ら規定的意味を持ちえないことになるし、逆に二つのセクターの対置関係の解消、あるいはその変動は、当該地方での古代的空間組織の転換を示唆する指標ともなりうるのである。本稿の目的は、以上のような前提に立ってフランス中部の司教座都市ブルジュ（Bourges）を中心とするペリイ地方におけるメロヴィング期の空間組織の構造を、極端に乏しい史料状況のもとにおいてではあるが、可能なかぎり解明し、その変化の条件を探ることにある。

2. ペリイ地方の定住構造

2. 1. ヴィラの配置

アラン・ルディの著書『ローマ期中部ガリアの農村地方』⁽⁷⁾は、主として考古学的手法によるブルジュを中心とするペリイ地方のヴィラやヴィクス、それに祭祀施設の分布およびその個別的な分析を軸とした定住史研究だが、われわれにとって特に興味深いのは生産組織であるヴィラの配置である。

ルディはこれまでの考古学的発掘、航空考古学による網羅的探査、偶然の機会による発見等々の所見を整理し、全体で58のヴィラをこの地方に確認している。⁽⁸⁾以下はそれを一覧にした表である。

これは現存する集落の下に眠っている遺構を除けば、ペリイ地方のヴィラ配置の全体的傾向を示すものと考えてよいであろう。さて、これら58の農村所領の分布は、次の地図から見てとれるようにある偏りをみせている。すなわち大部分のヴィラが、都市ブルジュを中心にして半径30kmほどの円内に配置されているのである。この圏内一帯は、北フランス・ピカルディ地方の開放耕地型の大穀倉地帯と同じく肥沃な黄土層に覆われており、シャンパーニュ・ベリシヨヌ（Champagne becrichonne）⁽⁹⁾とも呼ばれ、小麦をはじめとする穀物栽培に適している。またこの地帯の西端には泥灰岩質土と沖積土の層があって、葡萄栽培や牧畜、畑作などのより多様な農業も可能にしている。⁽¹⁰⁾

ところで、これらのヴィラが単に首邑都市ブルジュからあまり離れていない限られた圏内に集中しているばかりでなく、この地方の航行可能な3本の基軸河川、すなわちシェール、アルノン、オロンに隣接するか、あるいは当時の幹線街道沿いに立地している事実にも注目する必要がある。特に河川のうち最も川幅が広く水量の豊富なシェール川沿岸には、サン＝タマン＝モン＝ロン（Saint-Amand-Mont-Rond）からほぼ5kmおきに、ヴィエルゾン（Vierzon）に至までヴィラが点々と配置されている。こうした立地の在り方には、いうまでもなく農業・生

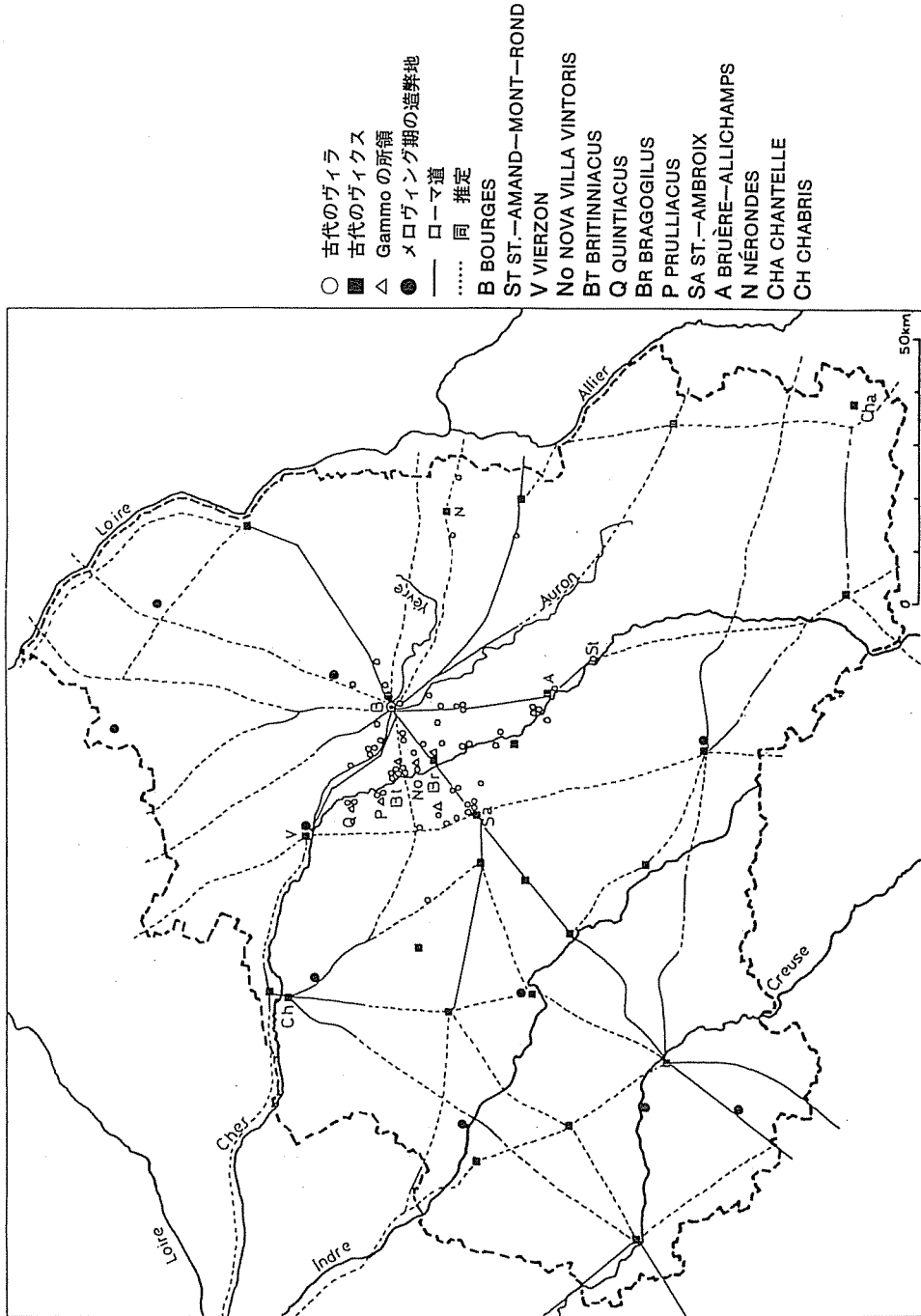
活用水確保のための配慮が働いたであろう。しかしながら水資源確保への関心は、ローマ期には必ずしも水源に近接した地点への生活、あるいは生産拠点の立地とは結びつかない。遠隔地からの水の供給のための水道建設は、その技術水準の高さばかりでなく、日常化した水道利用の伝統とローマの支配体制があいまって、物的にも心理的にも、その建設を容易にしていたからである。⁽¹¹⁾ シェール川が、オーヴェルニュ地方あるいはローヌ河口地帯から、トゥール地方を

[表1] ベリイ地方のヴィラ

ヴィラ所在地	コミューン名	ヴィラ所在地	コミューン名
Champ de Devant	Plaimpied	La Viarrennerie	St.-Ambroix-s.-Arnon
Champ Laurent	St.-Doulchard	Terres de Renaize	St.-Ambroix-s.-Arnon
Les Crots Blonds	Lapan	Mazières	Berry-Bouy
Les Bonnes	Vignoux-s.-les-Aix	La Croix du Ban	Bengy-s.-Craon
La Garance	Ste.-Thorette	St. Aubin	Marmagne
La Motte d'Inçay	Berry-Bouy	Le Grand Désarmé	Blet
Sauzay	St.-Loup-des-Chaumes	Les Varennes	Corquoy
Patareau Fourneau	Vallenay	La Grande Pièce	Villeneuve-s.-Cher
Les Sales	Lazenay	St.-Martin	Preuilly
Les Tuileries	St.-Thorette	Bigny	St.-Loup-des-Chaumes
La Chapelle	La Chapelle-St.-Ursin	La Motte	Preuilly
Les Boubards	St.Germain-du-Puy	Dame-Sainte	Saugy
Daugy	Paudy	Verrières	Lissay-Lochy
Les Cachons	La Chapelle-St.-Ursin	Plotard	Ste.-Thorette
La Chaume aux Couards	Levet	Marçay	Quincy
Les Crots Ménars	Lapan	Les Varroux	Bruère-Allichamps
Les Epinettes	Mehun-s.-Yèvre	Champ Chiron	Poisieux
Pouplin	St.-Caprais	Le Crot	Primelles
Les Coudraits	Cerbois	Les Grandes Pièces	Morthomiers
Launay	Quincy	Bois Roland	Le Subdray
Le Poirier Molet	Civray	La Salle	Ste.-Thorette
Le Grand Chausseroi	La Guerche	Corqueux	Ste.-Thorette
Les Nointeaux	Ste.-Solange	Moulin de Soulas	Châteauneuf-s.-Cher
Le Coudray	Civray	Champ Boba	St.-Ambroix-s.-Arnon
Les Maisons Neuves	Ste.-Thorette	Bois Blanchard	St.-Loup-des-Chaumes
Camp des Pois	Levet	Prés de Coulon	Levet
Terres de la Garrenne	St.Gerorges-s.-Arnon	Mouron	Bourges
Chemin de Lunery	Trouy	Les Sables	Berry-Bouy
		Champ Michelon	St.-Ambroix-s.-Arnon
			Orval

A. Leday, La campagne à l'époque romaine dans le Centre de la Gaule, Oxford 1980, t. 1, より作成

[図 1]



經由してロワール河口に達する最短の最も便利な通商路であった事実を考えると、むしろ河川を利用しての重量物である穀物の積出と運搬という輸送・流通上の関心が、より根本的にこれらのヴィラの立地を規定していたと思われる。幹線道路沿いのヴィラの配置もまた同様に、その生産活動が基本的には農産物市場を対象としていたことをうかがわせる。帝政期におけるヴィラの主要街道沿いの分布は、ロジェ・アガシュが網羅的な航空探査を実施した北フランスのソンム川流域地方のヴィラ分布の⁽¹²⁾パターンとも共通し、また奴隷制大所領の一般的性格に照らしてみても、それらは商品としての穀物生産を目的としていたと推定されるのである。

2. 2. ヴイクスの分布

農村領域には、ローマによる征服以前からヴィクスと称される小集落が存在していた。ヴィクスは街道の交叉する場所や河川の渡河地点に立地し、宿駅であると同時に在地的交換の拠点であり、また手工業生産の機能をも担い、加えて農村内部での政治生活やガリア人の伝統的祭祀の中心地であった。⁽¹³⁾

この二次的中心地とも言うべき小集落が、ガリア全域に極めて濃密に分布していたことが知られている。ルディはベリイ地方について25のヴィクスを挙げているが、これらの中には史料上明示的にそう呼ばれているものの他に、碑文などから手工業者、商人などの多様な職種の人々の定住が知られ、明らかにヴィクスの特徴を備えていると彼が判断したものも含まれている。⁽¹⁴⁾以下に掲げるのがその一覧表である。

[表2] ベリイ地方の古代ヴィクスの所在地

Ardentes	Le Blanc
Argenton	Levroux
Bourbon-l'Arche	Néris-les-Bains
Brives	Nérondes
Bruère-Allichamps	Sancoins
Chabris	St.-Ambroix
Châteaumeillant	Vatan
Chantelle	Vendeuvres
Clion	Venesmes
Déols	Vic-sur-St.-Chartier
Gèvres	Vierzon
St.-Thibaud	
Issoudun	

A. Laday, *La campagne à l'époque romaine dans le centre de la Gaule*, Oxford 1980, t. 1 より作成。

その分布は前掲の図1からもわかるように、ベリイ地方の西部、現在のアンドル県に多く、シェール川沿いの幹線通商路への5つの立地を除けば、ヴィラが濃密に分布している首邑都市

ブルジュに近い地域には少ない。反対にヴィラの生産組織の無い周縁地域に、比較的多く分布するというパターンを示している。集落としてのヴィクスの地誌的特徴は、家屋が道路の両側にそれぞれ一列に配置されていて、したがって街区をもたないという点にある。⁽¹⁵⁾

2. 3. 中心地：都市ブルジュ

カエサルがその著『ガリア戦記』の中で、ガリアでもっとも美しい都市のひとつに挙げたアヴァリクム（Avaricum）は当時すでに防壁と櫓を備え、市域内にはカエサルがフォルムと呼ぶ広場が設けられていた。前1世紀の中頃、ローマ軍との長期にわたる激しい攻防戦のすえ、このピテュリゲス族の首邑は陥落し、勝利者による住民の相当規模での殺戮が行なわれたらしい。⁽¹⁶⁾ローマ都市アヴァリクムは、このケルト人のかなり整った都市施設を大枠で継承したものとされている。同様の運命を辿った他の多くのガリア諸都市とは異なり、ここでは既存のケルト集落から少し離れた地点への新都市の建設が行なわれなかった。しかし4世紀には、他のガリア諸都市でも一般的に見られたように、都市名を旧来の地名から、部族名ピテュリゲスに因むブルジュに変えている。⁽¹⁷⁾

3世紀後半のディオクレティアヌス帝が公布させた最高価格令には、ブルジュでの織物業の存在が言及されている。⁽¹⁸⁾363年と368年の間に実施されたアキタニアの行政的分割に際しては、アキタニア・プリマの首都となっている。⁽¹⁹⁾4世紀初頭のガリアのどの首邑都市でも見られた囲壁化はブルジュでも行なわれ、全長2660m、面積26haを覆う市壁は基礎部分の厚さ約3mで、46の小塔で補強されていた。⁽²⁰⁾この堅固な囲壁は、古代末期から中世初期にかけてただ一度しか外敵の攻撃に屈したことがなく、そのおかげで都市ブルジュは大きな破壊を経験したことが無かった。最初に防壁を破るのに成功したのはシャルルマーニュの父ピピンで、762年周到な準備のすえ、巨大な攻城機を使つての成果であった。⁽²²⁾

ディートリッヒ・クラウデの研究によれば、中世初期ブルジュには都市参事会の存在を明示的に証言する所見が無いという。⁽²³⁾だがトゥールのグレゴリウスは、この都市における *primores urbis* に言及しており、⁽²⁴⁾また8世紀のブルジュ地方書式集には *virī magnifici* とよばれる集団が登場し、⁽²⁵⁾ここから有力市民によって構成される参事会類似の組織のあったらしいことが見てとれる。ガリアの司教座都市でひろく見られた、司教による都市支配は西ゴートの支配下に入った20年間を別にすれば、ブルジュでも8世紀初頭まで存続した。有力市民による市政運営は、そうした司教のもとにあつて機能したのであった。

6世紀のパリ司教ゲルマヌスや、7世紀のブルジュ司教スルピキウスの伝記は、この時期多数のユダヤ人がブルジュに居住していた事実を述べることによって、間接的にはあるが、この都市が依然としてこの地方の流通経済の中心地として機能していた事実を示唆している。⁽²⁶⁾首邑都市と周辺ヴィラとの経済面での有機的結合は、ヴィラ所有者がキヴィタス内部に倉庫を有していることから、かなり具体的な形で知られる。たとえば、ブルジュ司教スルピ

キウス第二伝には、市内に倉庫を所有する「高貴な」婦人への言及があるが、彼女が周辺にヴィラを経営する所領主であったのは疑いない⁽²⁷⁾。都市内のこうした貯蔵施設は、ヴィラの余剰農産物、とりわけ穀物を都市の市場で売却するためのものと考えらるべきであろう。この種の施設の存在は、メロヴィング期の幾つかの遺言状で見てとれる⁽²⁸⁾。

購買者は都市の住民ばかりでなく、おそらくは地域間の穀物取引をも営んだ商人が含まれていたと推定される⁽²⁹⁾。それというのも、メロヴィング期に頻発した食糧不足は、天災によるにしろ、戦争などの人為的原因によるにしろいづれにしても穀物価格を急騰させたからである⁽³⁰⁾。食糧不足や飢饉による被害などは、一般に地域的性格が濃く、それゆえ穀物は極めて魅力的な投機の対象になったのである⁽³¹⁾。

3. ブールジュの中心地機能⁽³²⁾

3. 1. ヴィラ・セクターとの関係

3. 1. 1. 古銭学の与件

都市ブールジュのヴィラ・セクターにたいする中心地機能の、メロヴィング期における持続を示唆するのは、この地方における貨幣造幣地の分布と、そこに読み取れる貨幣の流通速度についての所見である。19世紀までの中世初期古銭学を集大成したモーリス・プルーのカタログには、前世紀末までに発見・発掘されたベリイ地方を造幣地とする貨幣の一点一点の詳細な情報が記されている⁽³³⁾。これをもとに、ベリイ地方の造幣地を一覧にしたのが以下の表である。

[表3] ベリイ地方の造幣所

貨幣に刻印された銘文	現在地
Betregas	Bourges
Bareloco	Barlieu
Bellomonte	Beaumont
Capudcervi	Sacieres-Saint-Martin
Climone	Clémont
Dolus Vico	Déols
Duno	Dun-le-Poëlier
Mediolano castro	Châteaumeillant
Onanaciaco	Onzay
Rivarinna	Rivarennnes
Sesemo	Souesmes
Virisione vico	Vierzon

M. Prou, Les monnaies mérovingiennes, より作成。

上掲の表のデータを移した図1を参照されたい。まず造幣地がベリイ地方の周縁部に縁どるように位置していること、そしてそれらが主としてローマ時代にヴィクス・セクターに属していた地方に多いという事実が見てとれる。逆にヴィラ・セクターには、首邑都市ブールジュ以外

には造幣地が見られない点も注目すべきである。造幣地の存在そのものが貨幣使用を前提とし、社会の貨幣への欲求に応えるためのものであり、その分布密度はその地域における貨幣の流通速度と深い関連をもっている⁽³⁴⁾。こうした一般的因果連関に則して考えるならば、ヴィラ・セクターにおいてブルジュが唯一の造幣地であったという事実は、すなわちこの都市の造幣活動がこのセクターの貨幣需要を一手に引受けたことを意味すると同時に、同セクター内部での流通速度の速さをも示すものと言えよう。

これにひきかえ、周辺部のヴィクスに見られる造幣地の多さは、このセクターでの貨幣流通の速度の遅さ、あるいは貨幣が流通の流れから外され退蔵されてしまう例が多かったことをうかがわせる。

造幣量の面でも、今まで知られているブルジュを造幣地とする5枚のトリエンス金貨と3枚のデナリウス銀貨の計8枚のうち、7枚がそれぞれ異なる造幣人⁽³⁵⁾によって造られており、ここから造幣総量の多さが容易に推定されるのである。

限られたものではあるが貨幣現象に関わるこれらの所見を総合すると、一方においてはヴィラ・セクターに対する都市ブルジュの中心地機能の維持、他方においては前者とヴィクス・セクターとの構造上の差異という古代的な構図がまだ大きくは動いていないという印象を受ける。

3. 1. 2. ガモ夫婦の寄進状

メロヴィング期ベリイ地方について5点の証書が伝来していて、そのうち4点が都市ブルジュに直接関係している⁽³⁷⁾。だがこの中の2点は11、2世紀に作られた偽文書であり、その証言能力を見極めるのは困難である。残る2点、すなわちエウスタディオラという名前の婦人の遺言状とガモ＝アダルグディス夫婦の寄進状のうち、前者は非常に簡略でブルジュとその周辺領域に関して、見るべき情報がほとんど盛り込まれていない。こうして、わずかに697年の日付をもつガモとその妻アダルグディスの共同名義の寄進状のみが、ベリイ地方におけるその首邑都市とヴィラ・セクターとの関係を証言する貴重な文書⁽³⁸⁾として残る。

院長イルミノンの命令で、806年と829年の間に作成された有名なバリ、サン＝ジェルマン・デ・プレ修道院の所領明細帳の第11章は、Nuviliaco という所領の記述に充てられている。オギュスト・ロンニョンの地名比定によれば、この所領はまさしく697年に200km離れた同修道院に、ガモ夫妻が条件つきで寄進した一連のヴィラのひとつ Nova Villa Vintoris⁽³⁹⁾であるという⁽⁴⁰⁾。この証書を通じて、夫妻は総数で30のヴィラを遺贈している——表4参照——が、列挙されている最初の6所領のうち Nova Villa Vintoris を含め Britinniacus, Quintiacus, Bragogilus, Prulliacus の5つのヴィラが、図に示したようにブルジュの西10kmのところを南北に流れるシェール川沿いにあり、しかもそのうち4つがローマ期のヴィラの所在地と重なっている。残る Bragogilus といういかにもケルト的な名前の所領は、ヴィクスの所在と合致している。こ

の一带はヴィラ・セクターの中核地域であり、こうした現象は部分的にはあるがヴィラ経営が衰えていないことを物語っている。

[表4] ガモ=アダルグデイス夫婦の寄進所領

所領名	現在地
Nova Villa Vintoris	Villeneuve (arr.Bourges, ct.Charost)
Brtnniacus	Brétigny
Quintiacus	Quincy-sur-Cher
Bragogilus	Breuil (arr.Bourges, ct.Charost)
Grimoaldi Villare	—
Prulliacus	Preuilly-sur-Cher
*Rovere	—
*Mauro Villa	—
*Barbarione Villa	—
Villa Milies	—
Galdono Masus	—
Ferrarias	—
Ferrarias	—
Culmellae Montis	—
Alnaus	—
*Tricasini	—
Felcariolae	—
Noiolium	—
*Mundone Villa	—
Childeno Villa	—
Potiosus	—
Hadone Villa	—
Flaviagus	—
Alvernus	—
Postimiagus	Pouthumé (Vienne, arr.Châtelleraut)
Caceriae	—
Busxeriae	—
*Balbiagus	—
Cervatiacus	—
Vallis	—

*印はA. Lognon によって一応の地名比定がなされているが、その所在地に関して寄進状で述べられている条件と全く矛盾するため採用しなかったもの

この証書でさらに注目すべきは、ヴィラ・セクターが首邑都市に引き続き結びつけられている事実を別の面でも明らかにしているという点である。この文書が最終的に作成されたのはパリのサン＝ジェルマン・デ・プレ修道院においてであったが、⁽⁴¹⁾ 実はその内容は事前に——おそらくは前年の696年に——、695年にフランク王国の統一王となったばかりのキルデベルト3世の臨席を得たブルジュでの「貴族たちの集会で」(in conventu nobilium) 読み上げられており、⁽⁴²⁾ この寄進行為を市民達から承認してもらおうという手続きを取っている。市民によるこうした認知手続の存在こそ、まさしくヴィラ・セクターとブルジュとの緊密で有機的な結びつきの証言に他ならない。ここで言及されている nobiles は、おそらくブルジュの有力市民を指している。8世紀後半に成立したブルジュ地方書式集の6, 8, 9, 15番の4点に、都市ブルジュの何らかの政治組織を意味する curia という語が見えるが、⁽⁴³⁾ これを文字通りローマ期の都市参事会そのままの組織と考えることが出来ないとしても、だからと言って全く実体を欠いた純然たる書式墨守の所産と考えることもまた誤りであろう。すでに指摘したように、この都市には有力市民による何らかの都市運営機構が存在したことは確実である。いずれにせよ、7世紀末の時点においても、ブルジュがヴィラ・セクターと一体となって、その中心地としての役割を基本的に維持したことが推測されるのである。

ガモ夫妻の寄進になる30所領のうち、表4から見てとれるように、Grimoaldo-Villare, Barbarione Villa, Galdone-Maso, Mundone-Villa, Childeno-Villa, Hadone-Villa の全体で6所領がゲルマン人名あるいは、彼らを示す集団呼称を帯びている。帝政末期かあるいはメロヴィング初期の混乱の中で、領民が逃散したり廃棄されたりして定住の途絶したローマ・ヴィラを、新来のフランク人が再開発した可能性も大きいので、⁽⁴⁴⁾ これらを全て中世初期の新規開発所領とするわけにはいかないであろうが、いずれにしても6所領の同定は民族移動期とそれに続く時代の新来者のヴィラ経営の領域分布についての示唆を与えてくれるはずであり、そのことによって旧来のヴィラ・セクターを越えて新たな所領組織が創出されたか否か、ひいてはヴィラ・セクターとヴィクス・セクターの関係がどのように変化したか、あるいは変動しつつあったかが具体的にうらなえるはずである。だが残念ながら、現在まで6所領いずれも確たる地名比定がなされていない。今後この面での研究を推進させることにより、中世初期ペリィ地方の定住構造の変化を一層具体的に跡付けて行かねばならない。

3. 2. ヴィクス・セクターとの関係

ヴィクスのなかでもヴィラ・セクターに入り込むか、あるいは近接している集落、例えば St. -Ambroix, Bruère-Allichamps, Nérondes などでは、⁽⁴⁵⁾ その地の碑文の中にローマ市民に特有の命名法による名前を持った住民の存在が知られ、ローマ文化の浸透、言いかえると首邑都市ブルジュの中心地機能による一定度の統合といった事態が想定される。St. -Ambroix と Nérondes の墓石の浅浮彫像から、武具製造職人、穀物商人、金細工師、染物師、両替商、大工、

農民などの多様な職種の住民の存在が知られ、⁽⁴⁶⁾これらのヴィクスが近隣の定住地にたいして、二次的ではあるが一定の中心地機能を果たしたのが見てとれる。

ところで、こうした実質的にヴィラ・セクターに属すようになったヴィクス以外の、いわゆる土着の伝統的な性格を保持し続けているヴィクスは、メロヴィング期に首邑都市ブルジュとどのような関係にあったのだろうか。中世初期のヴィクスに対する都市の作用の最も重要な局面は、後者が司教座都市である場合、司教が農村伝道の拠点としてヴィクスに教区教会を建設したことによって切り開かれた、と言えるであろう。ベリイ地方に関しては、アルノン川以西のケルト的ヴィクスに建設された多くの教区教会の初期の守護聖人が、ブルジュの司教座聖堂のそれと同じ St. Étienne ⁽⁴⁷⁾であるところから、教会行政の拠点という新たな役割が、ブルジュに、これまでその中心地機能を及ぼしていなかった地域にそれを広げる機会を与えたとと思われる。この点についても、これ以上の考察をめぐらすための情報を欠いているというのが現状である。

4. 二次的中心地たるヴィクスの成長

上に述べたように、ヴィクスは教区教会の所在地というその宗教的機能を通じて、場合によってはそれ以前からの萌芽的中心性を強化したり、あるいは未だこうした特性を獲得していない場合は、それを創出する契機を見いだしたと思われる。というのも、その後ヴィクス周辺の定住地に礼拝堂が増加するにつれて、ヴィクスの教会はこれらの小教会を統括する主任司祭区の核として組織されるようになったからである。⁽⁴⁸⁾教会行政における、ヴィクスの司教座に次ぐ二次的中心地への発展が、8世紀の中頃には完了していたことがブルジュ地方書式集に収められた、ヴィクスを任地として想定されている主任司祭任命書式から読みとれる。⁽⁴⁹⁾

このようなヴィクスの周辺領域に対する二次的な中心地機能形成のもうひとつの具体的表現が、ヴィカリアと呼ばれる領域単位存在である。フランク王国の行政組織において、このヴィカリアは一般に伯領 (pagus) の下位単位として位置づけられ、その起源としてはシャルルマーニュ時代の行政・司法改革に求められている。⁽⁵⁰⁾このことを異論の余地なく証明する史料は存在しないが、仮にそれが事実であるとしても、ヴィカリアがヴィクスの中心地機能を核として自生的に形成されて来た領域単位であるということとは何ら矛盾しない。シャルルマーニュの功績は、ヴィクスを中心に既に一定の領域的枠組をともなって完成を見ていたあるいは形成過程にあったこの小領域に、単に公式に伯領の下位単位として国制上の位置付けを与えないにすぎないと見ることも可能だからである。⁽⁵¹⁾一律に行なわれた制度的な上からの「改革」の所産というより、むしろ既存の自生的枠組の継受と統合と見るほうが、限られた技術的手段しか持たない中世初期国家の統治手法に似つかわしく、またこの「改革」の結果生まれたはずの下位単位の呼称が centena, grafia, vicaria, condita など地域によって異なるという奇異な現象も、この⁽⁵²⁾

ように解することによって合理的に説明されるであろう。逆に、例えばカロリング国家の領域的解体や、その結果としての封建的分権化が問題にされるとき、「解体」とか「分権化」と称される現象の真のプロセスは何かを、定住構造が規定する領域的枠組の本質的に自生的な性格を考慮しつつ、十分に見究めなければならない。

[表5] 中世初期ブルージュ地方のヴィカリア (初出年代の早い順から)

ヴィカリア名 (その中心集落名)	史料初出年代	古代以来のヴィクス△印
Chantelle	768	△
Charenton-du-Cher	818	
Allouis	820	
Clais	841	
Brives	859	△
Nérondes	877	△
Bourbon l'Archambault	880	△
*Fabriacensis	912	
Onzay	915	
*Andriacensis	917	
Bouges	917	
Bubelle	917	
Venesmes	920	△
Précy	936	
Dunet	941	
Bourges	943	
Vatan	956	△
Sacerre	957	
Le Blanc	968	△
Vierzon	974	△
Rian	981	
St. Michel de Volangis	989	
Chabris	990	△
Soulangis	990	
Levent	1017	
Mehun-sur-Vèvre	9世紀中頃	
Murat	10世紀末	

*現在地不明

ヴィカリアが他の地方と同じく、ベリイ地方でも遅くとも9世紀に伯領の下位単位として安定した領域的枠組をもつようになったことは、それが土地の所在地表示の一般的書式に組込まれているところからも明らかである。例えばブルジュ地方書式集の15番は、シャルルマーニュの皇帝戴冠以後のフランク王の呼称である *imperator* が見えるところから800年以後のものと思われるが、結婚に際しての夫から妻への土地贈与を内容とする証書を下敷にした書式と推定される。そこでは当該土地の所在を示すために、*hoc est res proprietatis meas sitas in pago Biturigo, in vigarias illas et illas, in villa cuius vocabulum est illa...*⁽⁵³⁾ という定形的文言が使われている。実はこの書式より古い768年に、ベリイ地方で最初のヴィカリアの所見として *vicaria Cantellensis* が知られていて、この事実ひとつをとってもヴィカリア「制」のシャルルマーニュによる創設という主張は年代的与件と齟齬きたすと思われるのだが、それはともかくこの *vicaria Cantellensis* は明らかにその中心集落である *vicus Chantelle* に由来する名称である。⁽⁵⁵⁾ 古代のヴィクスについても、また中世のヴィカリアに関しても完全に網羅的なリストがないのでその対応関係を確定は出来ないのだが、表5に掲げられた11世紀末までにその存在が確認できる27のヴィカリア（そのうち20が10、11世紀の所見である）のうち、9ヴィカリアがローマ期に存在が証明されているヴィクスの名称に由来しているのである。

さて、ここで重要なのは、かつてのヴィクス・セクターの只中にあった伝統的ヴィクスが、先に引用した書式の文言からも推測されるように、8世紀後半までに首邑都市との関係で位置付けられ、その意味でキヴィタスの中心地機能に引き寄せられつつあったと見ることが出来るという点である。果たしてこの段階においても、農村領域がルボーの言う「均質な空間」を実現していたかどうかは疑問だが、少なくともローマ期のあの併存する二つの異質な世界という状態から大きく前進したのは確実である。

この過程を推進する主要な力となったのがヴィクスであったと思われる。こうした推測は別の機会に既に述べたが、⁽⁵⁶⁾ あらためてこれまで殆ど注目されることのなかったひとつの事実を指摘することでこの点を強調したい。それはヴィカリアの領域的枠組が成立する前段階として、ヴィクスを定点とする土地の所在表示の方式があったのではないかということである。ブルジュ地方書式集よりも古いオーヴェルニュ地方書式集には、まさしく *in pago illo, in vico illo, in villa illa* という文言が見られるのである。⁽⁵⁷⁾

こうした事例は書式の定式的文言にとどまらず、伝来している幾つかの証書にも散見される。667年の日付を持つオルレアン⁽⁵⁸⁾のサン＝テニャン修道院院長レオデボドゥスの寄進状には、ベリイ地方にある所領に関して以下のように記している。すなわち、…… *in pago Biturico cognominante Monte qui est iuxta Cabrias vico* ……とか、*villam Camberon, quae est iuxta terminum Clariacense vel Ucello vico* あるいは *portionem meam quae est iuxta Columnae vicum* などの文言である。ここからわれわれは、書式 *in pago illo, in villa illa* から *in pago illo, in vicaria illa, in villa illa* の書式に移行する中間段階として、*in pago illo, in villa illa quae est iuxta*

illum vicum という書式があった段階を想定してみたい。ちなみに Cabrias vico からは vicaria Cabriacensis (990年初出), vico Ucello からは vicaria Oscellensis (854年初出) が形成されている。また Columnae vicum はすぐ後で agro Clomnensi と言いかえられているが、この ager はフランソワ・バンジュの9-11世紀マコン地方に関する最近の定住史研究によれば、この地方でも少なくともその一部はヴィクスをその中心にしているという⁽⁵⁹⁾。

こうした土地の所在地を示す書式に登場してくるいわば中間的な領域呼称は、ローマ期に皆無と言わないまでも所領の極めて少なかったヴィクス・セクターにおける、ヴィラの開発、その増加を背景としており、中世初期の農村内部の発展のひとつの証言に他ならないと思われる。

5. 結 論

中世初期ベリィ地方の都市＝農村関係を特徴づけているのは、古代的なヴィラ・セクターを規律する諸関係が、その水準はさておき、一定の構造として基本的に維持されたということである。ここで忘れずに指摘しておかねばならないのは、そのことの意味についてであるが、ルボーの二つセクターの対照という図式は、古代都市を単なる消費の場としか捉えないマックス・ウェバーによって代表される見方に対して、古代都市の生産の組織者として果たした役割を正当に評価し、かつアウグストゥス帝に始まる都市建設とヴィラ的大所領の出現の並行現象という歴史的事実を整合的に説明するためのものであった、という点である。その意味では、ルボーのモデルは元首政期に開始された統治・生産システムとしての空間組織の、いわば初発局面を提示するものである。以後数世紀間のローマ支配の発展の過程で、こうした構造が変動する可能性は論理的には排除されていないのである。にもかかわらずルボーは、ローマ期を通じて基本的には自らが提示したモデルが妥当すると考える。ベリィ地方に関しても、これまでの検討から、こうした図式が新たな変革の芽を胎みながらも7世紀頃まで大枠維持されたと考えてもよいであろう。

だがこうした状況は、実はセーヌ川以北の北フランスの諸都市をめぐる情勢と著しく異なっている。例えばアラスやアミアンはブルジュと同じく、大規模な小麦栽培に適した肥沃な開放耕地型の穀作地帯の中心に位置し、ローマ期の都市建設に際して多大なヴィラ建設も行なわれたが、少なくとも中世初期にはルボーがヴィラ・セクターと名付けるような構造を示していない⁽⁶¹⁾。アミアン地方についてのアガシュの徹底的な調査は、古代末期までの時点での、この地方のほぼ全域にわたるヴィラ建設の形跡を確認しているからである。さらにアラスやアミアン両都市を取り囲むように分布しているのは、ヴィラではなくヴィクスなのである⁽⁶²⁾。これらの地域では古代末期にヴィラ・セクターの解体を含む、生産組織の大規模な再編成が生じたことを推測せしめる。その原因がおそらく、ベリィ地方に比して遥かに急速に発展したヴィラ経営の普及にあったらしいことは、その遺構の地方全体への広がりや数の多さから容易にうかがわれ

る。ローマ的所領経営の普及度という点から見て、北フランス一帯は北辺の地にありながら、ライン・ラントやイングランドと並んでいわば先進地域に属していた。古代末期から中世初期にかけての北ガリアの都市的定住についての概観を試みたポール・ヴァン・オセルの小論「3-9世紀北ガリアにおける都市建設と新都市：一つの問題」(1988)の中で、この地域での「処女地」の欠如を新都市建設不在の原因として挙げているほどなのである。⁽⁶³⁾

北ガリアのこうした状況と比較して、ベリイ地方の定住のありようは、少なくとも中世の開拓期には古代ローマ的空間組織のモデルから大きく脱していない。中世史の立場からすれば、古代的諸関係を基礎とするルボーのモデルは地域発展の「停滞型」検出モデルとも言えるが、今後ベリイ地方以外の中部フランス地域についての事例研究を進めることによって、未開拓の分野である南北フランスの中間領域における古代から中世への移行過程・歴史発展の特質を明らかにしていかなければならない。

註

- (1) 厳密な意味での発見ではないが、そのテキストが初めて解読され、内容が確認されたという意味での「発見」の例として、7世紀末のトゥールのサン＝マルタン修道院の「会計文書」(1970年にテキスト公刊)や、パリの東にあるシェル修道院の遺跡から文字どおり発見された、聖遺物の袋に付けられるフランス語でオータンティックと称される名札(1982年)のような例が挙げられる。
- (2) たとえばフランスでは Documents d'Archéologie Française (Maison de Science de l'Homme) や Bibliothèque d'Archéologie, イギリスでは British archaeological Reports などの叢書が目される。
- (3) Alain Ferdière, Les campagnes en Gaule romaine. 2 vols. Paris 1988.
- (4) 拙稿「1960年以降フランスにおける中世初期都市・農村関係」『愛知大学・法経論集・法律篇 第109号(1985年)』, 67-89頁参照。
- (5) Philippe Leveau, "La ville antique et organisation de l'espace rural; ville, villa, village" in Annales, Économies, Sociétés, Civilisations, 1983 no. 4, p. 920-36, id. Caesarea de Maurétanie. Une ville romaine et ses campagnes, Paris 1984. 参照。
- (6) ローマ帝国の統治機能を引受け、またその租税徴収をも担保した都市参事会員の都市から「農村」ヴィラへの「脱出」が、経済的、文化的に都市の活力を弱め、その衰退をもたらしたとするのが、多くとられている説明である。
- (7) Alain Leday, La campagne à l'époque romaine dans le Centre de la Gaule. Villa, vici et sanctuaires dans la Cité de Biturges Cubi, 2 vols, 1980 Oxford.
- (8) Ibid. vol. 1, p. 80-83. 参照。
- (9) フランス各地に見られる、特定の土質と自然条件をもった地方を表現するシャンパーニュ(champagne)という地理的概念については、Roger Dion, Le Val de la Loire, Étude de géographie régionale, reimpr. Marseille 1978, p. 3 参照。
- (10) Leday, op. cit. p. 9-12; Guy Devailly, Le Berry du X^e au milieu du XIII^e siècle. Étude politique, religieuse, sociale et économique, Paris-La Haye, 1973, p. 63-64
- (11) ガロ・ローマ期ベリイ地方のヴィラ経営と水道の役割に関しては Leday, op. cit. vol. 1, p. 58-60 参照。

- (12) Roger Agache, *La Somme préromaine et romaine*, Amiens 1978, p. 136. 参照。
- (13) Leday, vol. 1, p. 203 以下参照。
- (14) Ibid.
- (15) Ibid.
- (16) Dietrich Claude, *Topographie und Verfassung der Städte Bourges und Poitiers bis in das 11. Jahrhundert*, Lübeck-Hamburg 1960, p. 41.
- (17) Michel Rouche, "Le changement de nom des chefs-lieux de cite en Gaule au Bas-Empire", in *Mémoires de la Société nationale des Antiquaires de France*, 9^e série, t. IV, 1969, p. 47-64; Claude, op. cit. p. 44 参照。
- (18) Claude, *ibid* p. 42.
- (19) Ibid. p. 45.
- (20) Ibid. p. 43.
- (21) Ibid. p. 75-76.
- (22) 『偽フレデガリウス年代記続編』は次のように記している。"Videns praedictus Waifarius princeps Aquitanicus, quod castro Claremonte rex (= Pippinus) bellando ceperat et Bytricas caput Aquitaniae munitissimam urbem cum machinis capuisset..." *Chronicarum quae dicuntur Fredegarii Scholastici Libri IV cum continuationibus*, in M. G. H. *Scriptores r. Merovingicarum*, t. 2, p. 189.
- (23) Claude, op. cit. p. 71 参照。
- (24) "...quos cum plerumque verbis procacibus lacessiret ac iudicio publico provocaret, decretum est sententia primorum urbis..." *Gregorii episcopi Turonensis Liber in gloria martyrum*, c. 33, in M. G. H. *Scriptores r. Merovingicarum*, t. 1 pars. 2, p. 58.
- (25) "...viris magnificis Betorice civitatis..." *Formulae Biturigensis no. 7*, in M. G. H. *Formulae*, t. 1, p. 171.
- (26) Claude, op. cit. p. 74 参照。
- (27) Ibid. p. 70 参照。
- (28) 例えば、616年のル・マン司教ベルトラムヌスの遺言状に見える、パリやボルドーの *domus* などもそのような機能を備えていたと推測される。Pardessus. *Diplomata, chartae, epistolae, leges, réimp.* Aalen 1969, p. 197-215 参照。
- (29) 上掲のベルトラムヌスの遺言状に登場する小集落 Villedieu に住む商人 Sargitus などはそうした例であろう。 *ibid*. p. 205. なお、メロヴィング期の商人についての包括的研究として、Adriaan Verhulst, *Der Handel im Merowingerreich: Gesamtdarstellung nach schriftlichen Quellen*, in *Studia Historica Gandensia*, 125, 1970, 参照。
- (30) トゥール司教グレゴリウスは6世紀の末のある飢饉の際、パン数個で1トリエンスという途方もない高騰を示した例をあげている。 *Gregorii Turonensis Historiarum Libri X, lib. VII, c. 45*, in M. G. H. t. 1 pars 1, p. 365 参照。
- (31) カロリング期に成立した「サンス地方書式集」には7世紀末の一連の書簡が収録されている。これは当時のトゥール司教とパリ司教が交わした往復書簡であるが、それは飢饉によって食糧不足となったトゥールにパリから送られた穀物の粗悪な品質に対してトゥール司教クロドベルトゥスが書き送った強い不満の手紙をきっかけとする誹謗・中傷合戦のおもむきを呈している。その内容はともかく、食糧不足がかなり地域的性格を持っていたことの一例であろう。 *Addimentum e codice Formularum Senonensium*, in M. G. H. *Formulae*, t. 1, p. 220-226 参照。
- (32) 地理学の分野で開発された中心地理論の歴史研究への適用の問題については、田北廣道「中世都市史の研究手法としての「中心地」論の意義と限界—ドイツ学界を中心に—」『福岡大学商学論

- 叢』第32巻第3号(昭和62年)35-67頁の優れた論考参照。
- (33) Maurice Prou, *Les monnaies mérovingiennes* (Catalogue des monnaies françaises de la Bibliothèque Nationale), réimp. Graz 1969. p. 345-354.
- (34) Renée Doehaerd, *Le Haut Moyen Age occidental. Économies et sociétés*, Paris 1971, p. 308 参照。
- (35) Claude, op. cit. p. 75 によれば, プールジュの造幣所は司教座, Sainte-Croix, Saint-Sulpice の両修道院であった。
- (36) Prou, op. cit. p. 73-76. 参照。
- (37) Karl Heinz Debus, "Studien zu merowingischen Urkunden und Brifen. Untersuchungen und Texte", Erster Teil, in *Archiv für Diplomatik*, Bd. 13, 1967, p. 43-44.
- (38) *ibid.*
- (39) Pardessus, op. cit. t. 2, に収められたガモ夫妻の遺言状では, "Loca vero nuncpantur ita: id est, Nova-Villa, Vintoris, Britinniacus,..." と読まれ, Nova-Villa と Vintoris とは二つの異なるヴィラと理解されている。 *ibid.* p. 224
- (40) Auguste Longnon, *Le polyptyque de l'abbaye de Saint-Germain-des-Prés redigé au temps de l'abbé Irminon*, t. 1, Paris 1895, p. 194 参照。
- (41) "Et, ut epistola hujus donationis firma permaneat, Bituricas in conventu nobilium, in praesentia regis domini nostri Childeberti relecta, et Parisius civitate in monasterio Sancti Vincentii, die sexto mensis Aprilis super altare Sanctae Crucis posita, anno tertio ejusdem domini nostri Childeberti regis." in Pardessus, op. cit. t. 2, p. 245.
- (42) *Ibid.*
- (43) *Formulae Bituricensis*, in M. G. H. *Formulae*, t. 1, p. 170-76 参照。
- (44) この点については拙稿 "Implantations monastiques dans la Gaule du Nord. Un facteur de la croissance agricole au VII^e siècle: quelques éléments d'hypothèse concernant les régions de Rouen et de Beauvais". in *Flaran* 10, à paraître.
- (45) Leday, op. cit. t. 1, p. 206-240 参照。
- (46) *Ibid.*
- (47) *Ibid.*
- (48) この過程が具体的かつ最も明らかにされているのはリムーザンやオーヴェルニュ地方においてである。前者に関しては Michel Aubrun, *L'ancien diocèse de Limoges des origines au milieu du XI^e siècle*, Clermont-Ferrand 1981. 後者については Gabreiel Fournier, *Le peuplement en Basse-Auvergne au Haut Moyen Age*, Clermont-Ferrand, 1965 参照。
- (49) *Formulae Bituricensis*, no 5, in M. G. H. *Formulae*, t. 1, p. 170.
- (50) 例えば François-Louis Ganshof, "Charlemagne et les institutions de la monarchie franque", in *Karl der Grosse*. Bd. 1. *Persönlichkeit und Geschichte*, hrsg. von H. Beumann, Düsseldorf 1965, Bd. 3, p. 376-77はこうした見解の代表である。
- (51) 拙稿「フランク時代の Vicarius と Vicaria」『史観(早稲田大学)』96冊(1977) 参照。
- (52) 同5頁, および最近の研究として Jean-Pierre Brunterc'h の論文 "Le duché du Maine et la marche de Bretagne", in *Neustrie. Les pays au nord de la Loire de 650 à 850*, 2 vols. éd. H. Atsma, Sigmaringen 1989 pp. 29-127. がある。
- (53) *Formulae Bituricensis*, no. 15, in M. G. H. *Formulae*, t. 1, p. 176.
- (54) Devailly, op. cit. p. 75 参照。
- (55) Leday, op. cit. t. 1, p. 224 参照。
- (56) 前掲拙稿『フランク時代』では, 書式集という多少具体性に乏しい所見をもとに指摘した。

- (57) Formulae Arvernae, no. 6 in M. G. H. Formulae, t. 1, p. 31 参照。
- (58) Pardessus, op. cit. t. 2, p. 143.
- (59) François Bange, "L'ager et la villa, structures du paysage et du peuplement dans la region mâconnaise à la fin du Haut Moyen Age (IX^e-XI^e siècles)", in Annales, Économies, Sociétés, Civilisations, 1984, no. 3, p. 552 参照。
- (60) Leveau, "La ville", op. cit. p. 923 参照。
- (61) Agache, op. cit. passim.
- (62) Robert Fossier, La terre et les hommes en Picardie jusqu'à la fin du XIII^e siècle, 2 vols. Louvain-Paris 1968, t. 1, p. 182-183 参照
- (63) Paul van Ossel, "Création urbaine et ville nouvelle dans le nord de la Gaule entre le III^e et le IX^e siècles: une question ? in La ville neuve. Une idée de l'Antiquité ? éd. J. -L. Huot, Paris 1988, p. 173 参照。

[付記] 本稿は、1987年5月17日に熊本大学で開催された日本西洋史学会第37回大会での小シンポジウム「西欧中世における都市と農村・再論」において、筆者が行なった「中世初期フランス中部の都市と農村領域」と題する報告を改稿したものである。